

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

411
62

大東美術

第一輯
第二輯

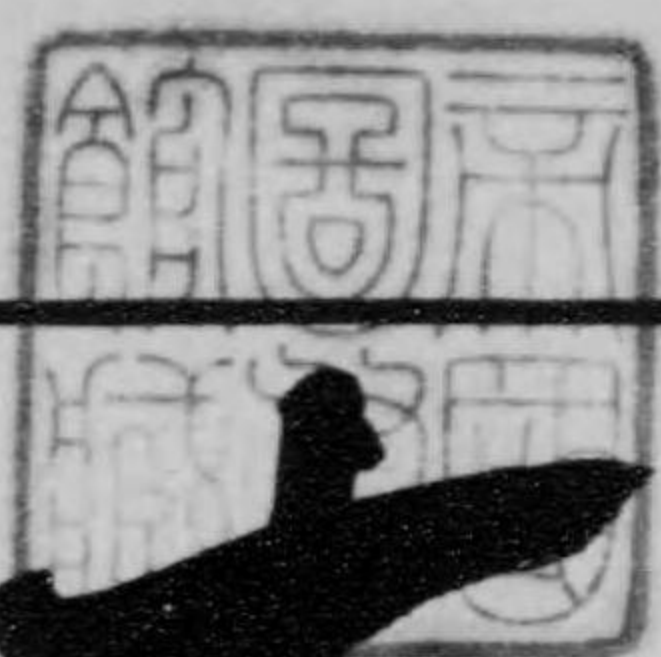
始



411-62

大東美術

第 第
二 一
册 輯



大東美術

14. 9. 19
内交

大東美術第一輯第二册

後晋 燉煌石室所出觀世音功德繪



此畫は燉煌石室から出たもので、唐代の文獻に謂ふところの功德の繪畫である。功德繪とは父母眷屬等の菩提の爲に佛像を畫かせ、像の下にその父母や自身及び子女達が禮拜供養する狀を寫し、多くは願文を書き、絹素の上下又は四周に縁を縫ひ着け、上端に帯を着けて壁に挂けるやうにした一種特別の畫幅である。斯様な功德繪は晚唐五季に行はれたが未だ表裝を施さなかつた、これがやがて北宋の熙寧頃になつて挂軸の行はれる本となつたのである。

この畫は額上に彌陀を戴く三目二臂半跏趺坐の觀世音菩薩を畫き、上に散花の兩飛天があり、本尊の左に東方提頭吒吒、北方大聖毘沙門の二天王と大慈氏、慈光、月淨、妙吉祥、大勢至、無邊身の六菩薩、右に西方毘樓博叉、南方毘樓勒叉、の二天王、龍像、惠化、善淨、日藏、善星、寶炎の六菩薩を畫いて各々膀子に尊名を題し、本尊の座前なる瑠璃臺上の瑠璃盤には花を盛り、寶冠璣珞には金箔を貼れり、而して其面貌手足に朱描を用いたのと鼻目の趣とは頗る印度の古壁畫に類し、丹青のあと今猶鮮麗である。この圖式は我が國所傳の密教經軌に合はず、菩薩の中にも我が佛教美術では建立しない尊名が少なくない。蓋し燉煌佛教の所信に外ならないのである。圖の下邊中央に功德記が書いてあるが、惜いことには題首薩字の上の四字と文の過半とが剥落して讀むこ

とが出来ないが、その末尾の天福六年歲次辛丑三月八日の文字は仄かに見ることが出来るから、五代後晋の時の製作であることが知れる。功德記の左の膀子に慈父幸者親善□供養、施主幸者親保通一心供養、男万子一心供養と題し、右には慈母王氏一心供養、女弟子□姉三娘女一心供養、女弟子七娘女一心供養、女弟子三娘女一心供養と題して各々その像を畫き、父の側には侍童が居り、母の側には侍女が居つて極めて小身に畫いてある。榜題中の幸者といふは、佛法に遇ふた幸福者と謂ふ意味である。即ちこの功德繪は親保通といふ者がその父母自身及び子女等の得福生善菩提の爲に造つたものである。

保通の傳は詳かにし得ないが、像の衣冠によつて布衣でなかつたことだけは推知が出来る。或は燉煌の官吏であつた者かと想像せられる。

この種の燉煌石室所出の畫幅や畫幀は多くシュタイン博士が持ち去つたので、その著セリンヂヤに詳しい記載があり、現に倫敦の英國博物館に保存せられてゐる。支那に於ては散じて諸家の收藏に歸してゐるのが少くないが、本邦にはあまり流傳せず、この繪が殆んど唯一の名品で、僅に英國博物館所蔵のものに匹敵する。絹本高三尺九寸、濶一尺九寸九分、山本氏香雪書屋藏。

宋 李公麟瀟湘臥遊圖卷

李公麟字伯時と云ひ、安徽舒州の人で、宋の熙寧三年に進士に登第し、後陸佃の薦を以て中書門下、後省副定官、御史檢法となつた。好古博學兼ねて詩に長じ又多く奇字を識り夏、殷、周以來の鐘、鼎、尊、罍の類皆歴く世次を考訂

大正
14. 9. 19
内交

し、款識を辨別した。而も其尤も絶れたものは繪畫で、心通意徹直ちに玄妙に造り、世に實とせられた。元符三年朝奉郎の官を辭し龍眠山莊に歸臥した。識者評して鞍馬は韓幹唐代畫師の名人に勝り、佛像は吳道玄唐代佛畫の姓手を凌ぎ、山水は李思訓唐大李將軍北宗の祖と崇めらるに似たりと謂つた。その畫に於ける用意周到で、凡そ目の觸るゝ所直に其要を領し、前代名手の佳所を集めて己の有と爲し、更に自から立意して一家の風を成した。その人物を畫くや骨に狀貌を區別するばかりでなく一切の動作感情を表現して尊卑貴賤を分別し、率略簡易の中に精妙の趣を得るを以て歸とした。平生白描水墨を好み専ら澄心堂紙を用ゐたが、古畫を臨摹する時には絹素を用ひて着色をも施した。

こゝに出した瀟湘臥遊圖卷はその遺作中の著名なもので、石渠寶笈清乾隆内府畫譜の題辭に詳しく記載されてある。此卷の落款に瀟湘臥遊伯時爲雲谷老禪隱圖とあり、卷の前後に顧從義、陳子有、高士奇、王延庚等の印があり、董其昌の題記の外に、南宋孝宗の代である乾道の庚寅と辛卯の兩年になる跋に、信齋居士葛鄂、澹齋居士葛鄂、半齋張貴謨、蒙齋居士章深、如齋章文、愚齋張泉甫、可齋居士葛鄂の文、及び鈞齋、理齋、壘叟の詩がある。卷高九寸五分、瀾一丈二尺三寸、幅中畫上に太上皇帝之寶の六字の大印があり、その次ぎに乾隆帝の御識がある。即ちこの卷は李龍眠が雲谷禪師の爲めに畫いて贈つたもので、上海の顧從義明高僧顧祖瑛の著者な故藏家、秘藏の四寶と稱せられたもの、一つで、後ち陳子有、高士奇の藏を経て乾隆の内府に入り、後出でて遂に我に流傳したのである。この卷について異説が無いでもない、吳子敏の大觀錄に、龍眠下筆、沈深多古趣、此却

元 倪瓚南渚泊舟圖冊頁

倪瓚字元鎮と云ひ、東海瓚、懶瓚などと署名し、姓名を變じて美玄朗、玄映などと云つた。又荆蠻民、淨名居士、朱陽館主、蕭閑仙卿、雲林子などの別號があつた。性尤も狷介潔癖でそれが餘りに極端であつたから人は倪迂と呼んだ。江蘇無錫の貧産家で、詩書畫を善くし、四方の名士日に門に至り、家に清閑園を築き、法書、名畫、珍籍を藏し、四時の卉木外を繞り、喬木脩篁蔚然たるものがある故に自から雲林と號したといふ。至正の初め海内無事の時に當り、突然その家貨を散じて親戚故舊に分ち與へた、人みな之を怪んだが未だ幾何ならずして兵變起り、富家は悉く禍を被むつた、而して雲林は扁舟笠笠で震澤三泖の間を往來して居つたが爲に、獨りその患に罹らなかつた。張士誠累りに雲林を拘致せんとしたが、漁舟に逃れてよく免がるゝことを得た。又其弟士信が雲林の畫を善くすることを聞き、人をして絹を持たしめ金幣を借めて畫を乞ふたが、雲林怒つて予れ王門の畫師たること能はずといつて其絹を引き裂いた。その後士信の爲に幾んど殺されんとしたことが記載にある。明の代になつてからは、黃冠野服で江湖の間に漂遊し、愈々恬退を務め、洪武七年十一月十一日、年七十四で歿した。

この圖は清室内府藏する所の、名畫寶笈と云ふ大冊中の一頁で、その題識に將游吳松、舟過雨里、爲玄素翁留寓其處、泊舟南渚、忽然四改月、玄素翁之季子叔陽、隱跡爲黃冠師、願以詩酒自放、三月廿日賦詩見贈、余輒畫此以贈とある

纏弱、恐是南渡以後人筆、然諸政皆異蹟とある。この點は廣く世の識者の研究を俟つ所である。

此畫一見何等の奇なきが如くであるが、仔細に見來るときは、重疊の山體遠く香深に連なり、微茫として際涯なく、楓葉蘆花、板橋漁屋、瀟湘の景物を寫し出して餘蘊なく、水墨を疊染して濃淡遠近を現はし、匡廓を暈染の裡に藏し、著筆疎散に似て而も用意極めて慎重、洵に觀て厭くなきの作である。乾隆帝御題の文に、宋復古名は地蘇東坡と同時の瀟湘晚景圖と較べて未だ孰れか甲乙なるを知らず、一再展玩、雲山楚水、眞に臥遊も曾ならずと歎賞せられたのは尤もなことである。

この平遠の景色より變じて波濤を捲き起し、大江疊嶂、深林稠木、煙を含み雨を濡る狀を寫して奇觀を極むる處は、冊を改めて掲出する。菊池氏は空菴藏

宋 李唐山水圖卷

此圖は前冊に出した山水圖卷の第二段で、峯巒樹木、溪橋屋舍、皆その體裁縦横の技を以て揮灑し、點景の人馬も又簡勁の筆を以て能くその姿態を盡し、烟蒸霧凝、處々虛實を照應せしめ、暈染の輕妙と、骨法の勁健と、相映帶して具さに溪山の趣を表はしてゐる。

李唐字希古と云ひ、河陽三城の人、宋の畫院の待詔で、劉松年、馬遠、夏珪と共に南宋の四大家と稱せられた。委しいことは前冊を參照されたい。山本氏香雪書屋藏

やうに、雲林が江湖に放浪し、知己に逢へば即ち四たび月を閱するも敢て詩酒微逐を辭さなかつた風流三昧の生活が想見せられる。雲林の畫は初の漢源を師としたが、晩年益々精詣、遂に古法を一變して天真幽澹を宗とし、林木平遠、枯槎竹石を畫いて古今に獨絶する。その畫は多く側筆を用ひ、山石の皴法は折帶法により、轉折の處、諸家の鈎筆とは大に趣を異にして、簡率の酌を表はすに適し、暈染多からずして而も疎淡の中に高遠の意致を藏し、點苔は橫点が特徴で、後世秋林平遠圖は多く雲林を以て規範とするのである。紙本水墨、高一尺五寸五分、瀾一尺五分

明 董其昌仿趙吳興溪山仙館圖軸

董其昌字は玄宰、思白と號し、江蘇華亭の人、官は禮部尚書に至り、崇禎九年八十二歳で卒して文敏と諡し、太子太傅を贈られた。その書は清の康熙以後廣く朝野の間に行はれて、元の趙子昂と共に清朝三百年間の書風を支配し、本邦にも著しくその影響を及ぼしたものである。畫は宋元諸家の長所を集め、それを自家の熔爐中に融合して獨得の領域を開拓し、瀟灑生動人力の及ぶ所に非らずとまで云はれた。洵に有明一代の大家である。平生書畫ともに自から矜持する所高く、貴人巨公が禮を厚ふしてその畫を索めても大抵は他人を借つてこれに應じた程であつたが、その一面に和易恬淡な處もあつて、時には自筆の出來上つてゐる際、僮僕がこれを贋作と取り代へて置いても欣然として款題をしたと傳へられてゐる。家に侍女を多く置いたが、それらが各々絹素を用意して畫

を得るに力めたから、真蹟を得んとするものは閨房によるものが多かつたと云ふことだ。

こゝに出す所の圖は天啓三年震澤の舟次に於て元の趙吳興の溪山仙館圖に仿ぶたもので、題記に精しくその由を書いてある。例の董家の面目はこの一圖でも優に之を観ることが出来る。曾て高士奇の藏であり又乾隆御府の寶と爲つた名蹟で、今は上海の蔣氏密韻樓の珍藏に歸して居る。紙本水墨、高一尺八寸三分、濶一尺一寸五分

清 王翬仿范華原深山古寺圖冊頁

王翬字石谷、耕煙外史、清輝主人、烏目山人など、號した。江蘇常熟の人で、幼いときから畫を嗜んで、運筆精熟、天機流露、適かに時流と異なるものがあつた。太倉の王鑑州^州が虞山に遊んだ時、石谷が人を介して自畫の扇を廉州に呈した所が、廉州大にその妙に驚いて早速引見し、石谷は弟子の禮を以て見え、廉州之と談じて益々その才を異とし、子當に古人に造るべしと曰つて伴ひ歸り、先づ命じて古法書を學ばしめ、數ヶ月してから、親から古人の名蹟摹本を指授したから、石谷の技術は大に進んだのであるが、適き廉州が遠地に任官したので、王奉常^時に托さなければ此子の大成を期することが出来ぬと思ひ、そこで奉常に謁せしめた。奉常其學力を試み感歎してこれ煙客^{王翬}の師なりと曰ひ、手を導へて江南江北に遊び、畫く收藏家の秘本を觀撫せしめた。石谷親しく二王^{王羲之 王獻之}の教を受けて神悟力學し遂に一代の作家となつた。奉常に

田能村竹田枯木竹石圖軸

實曆の頃池大雅が崛起してより、寛政から文化文政にかけて南宗文人畫は海内を通じての流行となつた、この風潮は維新前後まで波及したのである。天明以來應舉、吳春、岸駒等が京都に蟠居して勢力を張つたのに對して、福原五岳、木村眞齋等の文人畫派は大坂に割據し、次いで寛政、文化に十時梅崖、岡田米山人、濱田香堂等が各々の好尚する處を以て名を馳せ、文政以後には森川竹窓、金子雪操等が輩出したが就中大阪文人畫の泰斗とせられたのは岡田半江であつた。當時九州の田能村竹田は、屢々この地に滯留して篠崎小竹や半江等と交を結んだ。京都にても年を経ると共に漸く文人畫が勢力を伸張し來つて、文化以降名の著はれたものに浦上玉堂、全春架、中林竹洞、山本梅逸、小田海樵、眞名海屋、日根對山等があつたが、竹田が斷金の契をなし第一の知己となしたのは頼山陽で、山陽もまた深く竹田を推重した。竹田は又陶工木米、僧雲華等とも懇ろに交つた。當時江戸では谷文晁が南北を併せ畫いて盛名を馳せたが、純粹の南宗畫を以て名を擧げたものに渡邊峯山、椿椿山、高久露屋等があつた。長崎は江戸時代に於ける唯一の貿易場であつたから、支那、阿蘭陀の文化はこゝから傳はつて、學問藝術の中心地であつた。この地と交通の便ある九州地方は、自からその影響を受けて、文運夙に開け、従つて畫家も多く輩出したのである。さきに大雅について文人畫の根柢を固め、以て文化文政の盛運を來たしめめたのは實に肥前の銅雲泉の功である。雲泉は晩年友を負ふて諸國を漫遊し

其作を見て歎じて曰ふ。氣韻位置何を生動天然なること古人の如く竟に然るか

吾年暮に睡んとして何の幸ぞ石谷を見ることを得たる、又恨む石谷が董宗伯

畫其君のこゝの爲に見出されざりしをと。のち廉州其畫を見て感歎して曰はく、

王時敏の師なりとの爲に見出されざりしをと。のち廉州其畫を見て感歎して曰はく、

石谷乃ち能くこゝに至る、師は必ずしも弟子より賢ならずと。康熙庚午の歲詔

を奉じて南巡圖を作り旨に稱ひ厚く賞賜せられた、東宮特に山水清韻の四字を

書し賜つた、實に異數である。家居三十年應酬倦むことを知らず、平生名士の投

贈にかゝる詩文を集めて十卷となし清韻贈言と曰ふ。康熙五十六年卒年八十

六。

武進の惺齋^平も又山水を得意としてゐたが、石谷を見るに及んで自から及ば

ずと爲し、是道兄の獨歩に讓る、予妄に天下第二手となるを耻すと、即ち山水

を舍て寫生^{花卉}に改めてこれを避けた。嘗て曰へらく古今來筆墨の顛倒相入る

能はざるもの、石谷則ち巖して之を筆端に盡き融治して以て出す、神なるかな

技乎と。蓋し南北を合流せしめたるを云つたのである。

この圖も怡賢親王^{名は九郎、康熙帝の第八子、龍興寺の叔父に當る、部内の收藏にかゝる畫冊の一頁で、首頁には明善堂書畫印記の圖章あり、范寬^{字中正、華原、仲立、華原、}の筆意}

に倣つた傑作である。峯巒樹石、古朴剛健、謂はゆる河朔の氣象紙素に漲り、

皴擦嚴正、運筆凝拔、具さに規矩を存して而も板刻に似せず、濃淡遠近克く度

に合し、盈尺の一幅能く深山を收攬して筆墨の能事を盡し、微塵も浮華の氣な

く、實に傲古山水中の絶品と稱するを妨げない。

北京張氏雪盞齋藏、高一尺三寸四分五厘、濶一尺九分

到る處雅人と交遊して文人畫の隆興に貢獻した。これ維新前に於ける南宗文人

畫の大勢である。竹田は豊後竹田の人で、岡藩の侍醫、碩庵の次子として安永

六年に呱呱の聲をあげた。名は孝憲字は君舉、通稱を行蔵と云ひ、又九幾仙史

藍水狂客、紅笠詞人、花竹幽窓主人、雪月書堂、補拙庵などの號を用ひた、性

學を好み、詩詞を善くし、才思秀拔、年廿三のとき藩の儒員となり、藩學唐橋

君山の後を受けて豊後國誌を編成し、又京に上つて經學を村瀨椿亭に受け、居

ること二年で國に返つたが世務に堪へず病と稱して致仕した。時に三十八歳で

あつた。是より復た經史を講せず、専ら文雅風流の生活をつまめた。竹田畫を

嗜むこと甚しく、初め藩中の渡邊蓬島、瀨野眞齋に就いて學び、壯年長崎に遊

び、後江戸に出で、文晁にも畫法を問ふたが、何れも満足する能はず、明清人

の遺蹟を研鑽し、遂に一家を成すに至つた。竹田また煎茶に精しく、高遊外上

田秋成の後を受けて新道の名家と稱せられ、和歌にも流能であつた。天保六年

江戸に赴く途次大阪に至り、吹田村で病を得、五十九歳で卒した。著書に填詞

圖譜、竹田莊詩話、百活矣、陶寫小語、今才調集、泡茶新書、師友畫錄、山中

人體舌、紅笠詞などがある。竹田の畫は點染苟もせず、寸練尺素にも全力を盡

し、且書卷の氣充溢して脫塵超凡、他人の追擬し能はざるものであるが、格調

高遠に過ぎて却つて時眼に入らず、久しく世俗の喜ぶ所とならなかつたのであ

る。平生の作、山水尤も多く、好んで乾墨枯筆を用ひた、人物花鳥も畫いて頗

る韻致の饒かなるものがある。

この圖、筆致簡淡疎逸、よく邦人の臭味を除却して直ちに元人の堂奥に參する

の概がある。紙本水墨、金山氏天下名山莊藏

北涼 佛説菩薩藏經殘卷

新城の王樹樞氏が新疆省に布政使として在任十年の間に、その地で獲得せられた經卷類は約三十卷で、其名を知る能はざる断片は二百餘種の夥しい数に上つたが、今は大抵中村不折氏の有となつて居る。この大涼王大且渠安周供養經即ち佛説菩薩藏經の殘卷も其内の一つで、高八寸五分、長三尺八寸あり都善士階溝から出た北涼人肉筆の奇らしいものである。一行十六字詰普通經卷は十七字詰で、卷末に承平十五年歲在丁酉、次行に書吏臣樊海王氏の新羅助古録には樊海とあり寫、次行に法師第一校次行に又法師第一校、次行に嗣主道道字と記してある。承平十五年は今を去ること千四百六十九年で、宋の大明年、北魏の太安三年に當り、本朝では雄略天皇元年に當る。書體は今録今録と稱するもので、その絶妙な標本である。これを見ると鑿寶子碑や、今獨逸にある且渠安周造寺功德碑などの運筆法が筆を指すやうに分かる。鑿寶子碑は晋の太亨四年で、この經卷より五十三年前に當るが、安周造寺功德碑はこの經卷と年號を全うし、承平三年の建造で、書體は殆んど、同一人の筆であるかのやうに酷似してゐる。そこでこの經卷と密接な關係を持つところの且渠安周造寺功德碑に就いて一言し、延いてこの經卷が書史の上に重要な位置を占めるものであることを立證したいと思ふ。不折氏曰く今から十二三年前のこと談書會で且渠安周造寺功德碑拓本の復寫の又復寫を會員に頼つたことがあつた、それはもと網目版の編寫で、更にそれを擴大したのも

重要な資料であるのみならず、この經卷とかの碑とを對照し比較研究するとき北涼時代の書風殊に今録と稱する楷隸混合の書體と筆意とが分明に了解せられるので、書學の研究上にも絶好の資料である。

これは且渠安周造寺功德の碑で西曆千九百二年から三年にかけての冬、獨逸から支那に派遣せられたAnton von Grünwaldが、新疆省土魯番の東方約三十キロメートル程なる喀喇和卓に近い荒廢した街の遺跡の中から發見した、現に Königl.ichen Museum für Völkerkunde Zu Berlin. 柏林市教育博物館 に保存されてゐる。



宋 黃庭堅書王長者墓誌銘彙

黃庭堅、字魯直と云ひ、山谷道人と號した。洪州分寧の人で、進士に擧げられ、熙寧の初め國子監留守となり、哲宗召して校書郎に任じ、徽宗即位して吏部員外郎に擢用した。尤も草書を善くして周越、蘇子美、張長史、懷素などの

のであつたから、粗い點々が滿面に現れて、餘り實物を勞弊させるものではなかつたが、それでも六朝書碑の研究に材料の乏しかつた當時のこと故、可なり貴重な資料とせられたものだ。この原本は孤拓本で、端方氏が歐洲を視察した時柏林博物館に於て手拓して來たものである。その後上海で發行した神州國光集第六卷中に、珂羅版縮印が掲出せられたので、初めてその全豹を窺ふことが出来たが、猶實物大の複製でもあればと念願してゐたとき、偶然にもこの經卷が手に入り、從來夢想だもしなかつた眞蹟を目の當りに見ることが出来たので歡喜満足は非常なものであつたと。

さてその碑の左肩上に年號があるが生憎其處が剝蝕して辨じ難い、支那の一考證家は泰安と讀み、秦字は古太字に通ずるから太安三年と解釋して居るが、獨逸の فرانケ教授は、第二字は平字であるらしく推量されるが、第一字が判然せぬといひ、この碑を研究した書 EINE CHINESISCHE TEMPELINSCHRIFT AUS IDKUTSAHRI BEI TURPAN DR. O. FRANKЕ フランケ教授 土魯番喀喇和卓出土 造寺功德碑 には、承平であるか永平であるか判断が付かぬが多分承平であろうと言つてはゐるが、この碑の建設せられた正確な年代に充分に研究されて居らぬ。承平といふ年號は北涼が亡んで後の私の年號で、凡ての書籍に載つて居らぬから確定が甚困難であつたが、こゝに掲出する菩薩藏經に承平十五年とあり、且つその書體が全然一致して、而もこれは且渠安周造寺功德碑であり、菩薩藏經はその人の供養經であることから推して、碑の建造が承平三年であることが始めて斷定し得られたのである。さういふわけでこれは歴史上貴重な

衆美を集めて大成し、楷行書も又自から一家の風格を成した。蘇軾と並んで蘇黃と稱せられ、又蘇軾、米芾、蔡襄或は言ふ所の三家と併せて、北宋の四大家と呼ばれた。唐代歐陽詢、虞世南、顏真卿、柳公権の諸家が築き上げた規矩森嚴の書法は、宋代に至つて一變し、獨り蘇軾が唐人の法度を守るあるの外、蘇黃米三家の筆致は、奔放自在で繩墨に拘はらず、大に個性の特徴を發揮した。山谷の書は東坡のそれと匹敵してゐるが、更に筋骨勁健、奇姿橫逸、頗る霸氣に富み、本邦福林の徒や學者の間に特に喜ばれたものである。

これは王永裕の墓誌銘の草稿で、山谷四十二歳の時の書である。行文改京の跡を存し、文章の參考として有益なばかりでなく、其書が率意の作であるがため一入山谷の眞面目を發露した稀世の珍蹟である。固と陳繼儒、項子京等の鑑賞であつたが、轉傳して近い頃端方氏から林熊光氏或は言ふ所の林氏の手に移つた、林氏は愛玩惜かず其書を尊山谷室と號した程であつたが、今は阿部氏藏館の有に歸してゐる。高一尺、長二尺五寸九分

明極楚俊書南浦語錄跋

明極楚俊、俗姓は黃氏、元の明州慶元府の人、十二歳のとき靈巖寺の竹庵喜聖寺に出世し、大いで瑞巖、普慈の兩山に住し、又靈隱、天童、徑山、淨慈の諸山に徧參したが、皆請じて第一座とした。後醍醐天皇の元徳元年、微に應じて來朝した。翌年天皇宮中に召して法要を聞き給ひ、特に佛日焰慧禪師の號を

賜ふた。攝津の廣嚴寺を創建したが、北條高時建長寺に請じ、後召されて南禪寺、建仁寺等に任じた。嘗て廣嚴寺にゐたとき、楠正成の來訪に接して法化した。楠公問ふて曰く、生死交謝の時如何と、師答へて曰く、兩頭共に截斷し一劍天に倚つて塞しと、楠公曰く畢竟什麼と、師威を振つて一喝す、楠公禮拜して去つたといふ。建武三年九月廿七日遺偈を書して曰く、七十五年一條鐵、大地粉碎、虚空迸裂と、筆を抛つて寂した。靈骨を相模の雲澤庵と京の少林庵とに收めた。

南浦禪師は駿河阿部郡の人、宋に入り虛堂禪師に參して正傳を得、文永四年歸朝した。語彙が三卷ある。

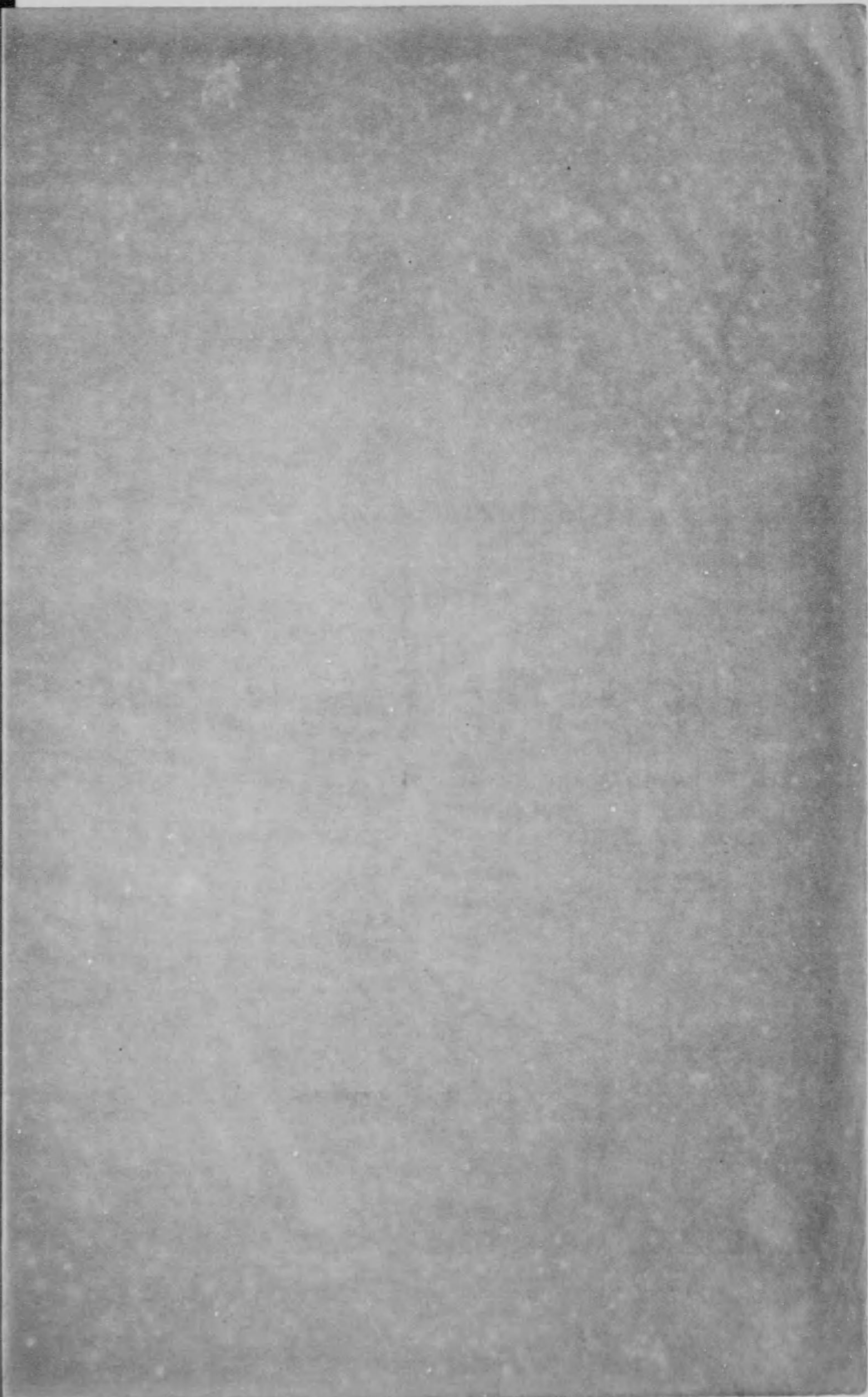
これはその跋として明極が書いたのである。宋代禪林の書風は何れも一種相似たもので、大體張即之と黃山谷の風であつたが、それが渡來の僧や入宋の僧等の手によつて、日本禪林の筆蹟の懐となつたので、明極の書が時代の風潮を帯びてゐるのは當然である。當時尊圓法親王流や、二條家風や、上代様など何れも御國振りを發揮した假名書盛行の時代に於て、この種禪林の書は頗る異彩を放つたものである。由來本邦禪林の書で最も珍重せられるのは大燈國師であるが、その師南浦禪師の書が入宋しながら宋風を帯びなかつたのに反して、大燈國師の書は却つて宋代の調を帯びてゐる。明極の書は大燈國師の書と並び重んぜられて居るが、その書蹟の今に存するものは頗る罕である。

この書一見甚だ稚拙のやうであるが、熟覽すると骨力勁健、運筆縦横で、枯淡天真の街氣なく、規矩を擺脫して遊行自在、能く禪機を得たものでなければ

到達し能はぬ境地を展開してゐる。紙本高一尺三寸、濶一尺四寸二分五厘、東京帝室博物館藏



後晉 敬煌石室所出觀世音功德觀



南
山
真
賞

潇湘雨為三
楚佳境每讀楚

賦楚宋復古備

湘晚景圖詩輒

為神佳惜不乃

一見也今見龍

眼是圖正未如

孰為甲乙一再

展玩雲山整水

真不啻卧遊矣

善跋謂顧氏名

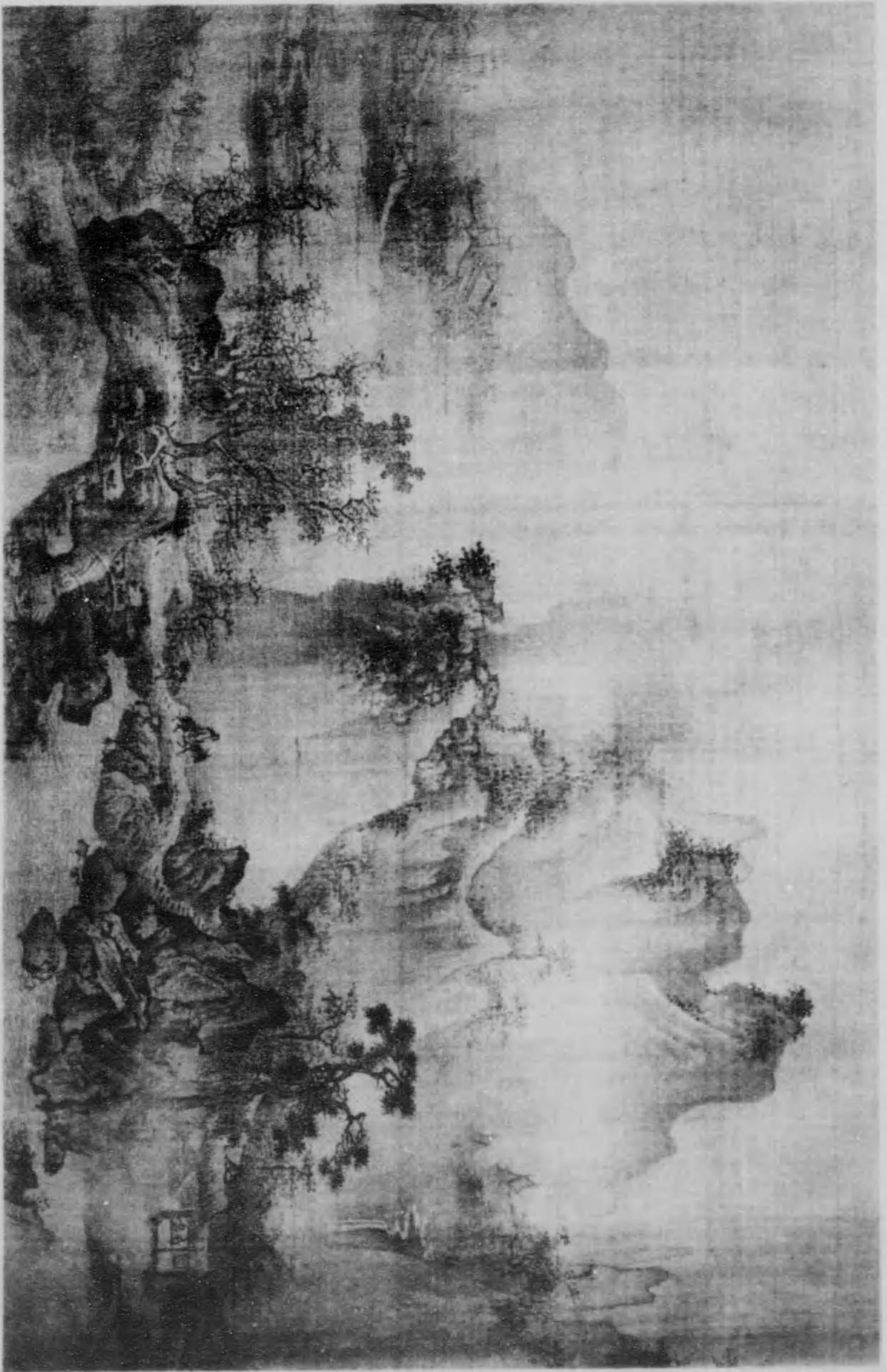
卷有四今乃數

而後合不異豐

城之過也乾隆

御識





宋 李唐山水圖卷

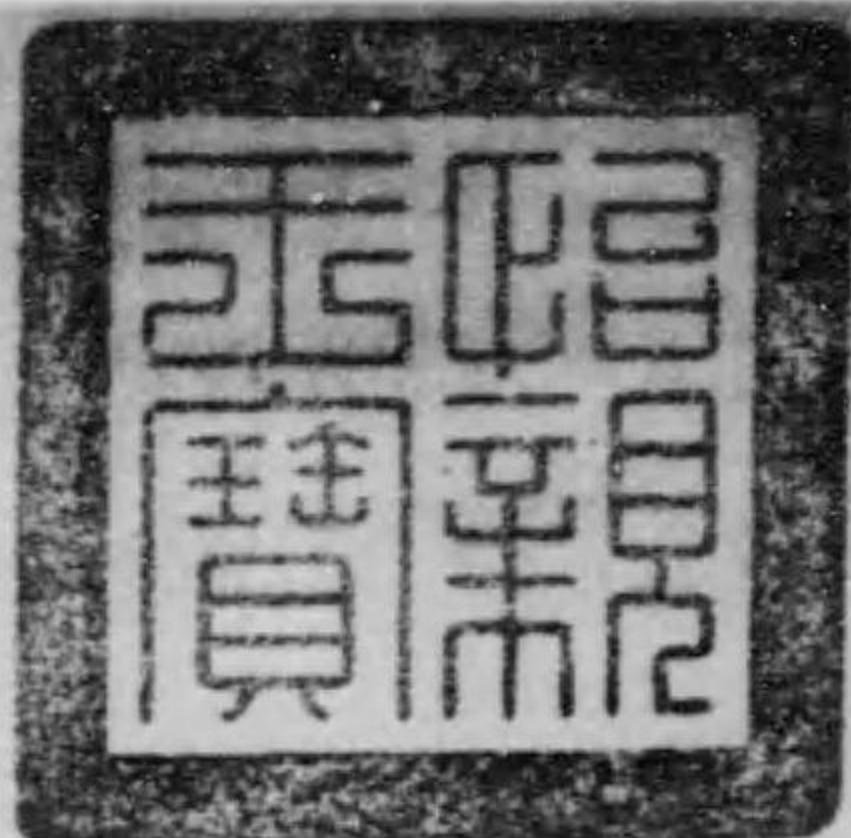
至正三年暮冬將游吳
松舟過甫里為玄素翁
留寓其處泊舟南渚
忽然四改月玄素翁之
季子仲陽隱跡為黃
冠師顏以詩酒自放三
月甘賦詩見贈余輒
畫此以贈云所明見之
當共一笑也滄浪漫士
倪瓚記

波光冉冉遠鷺使文物空且
香永和遠宿重尋舊城
郭當時風致已無多
東坡徐重



明 董其昌仿趙吳興溪山仙館圖軸

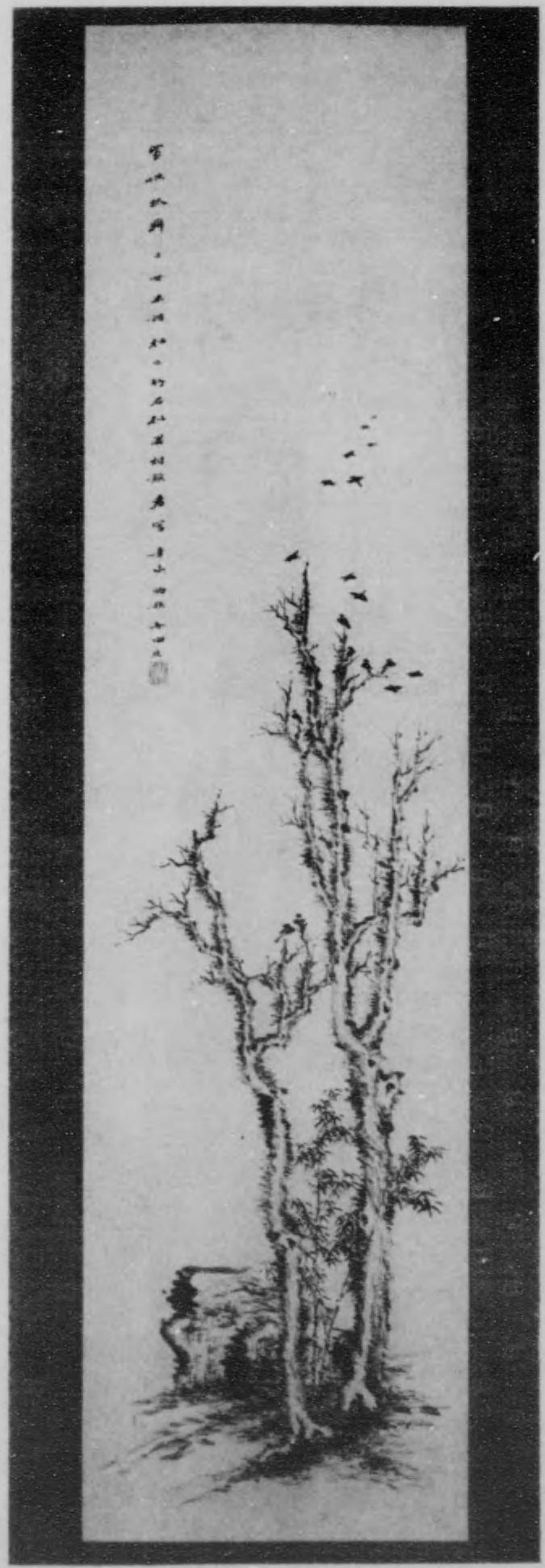




深山秀傑
古寺晴紅
傲花筆原



清 王翬 傲花筆原 深山古寺圖冊頁



田能村竹田枯木竹石圖軸

度次冒權耶菩薩摩訶薩觀心供養如來

聖眾花若香若以纏繞若以末香若以

塗香若以幡蓋衣服飲食具藥醫資生

之物若起僧坊若立首林若經行處若以

泥瓴若以井泉若以人使如造寺餘供養

具種種供養如來聖眾菩薩咸能此第四

法能淨具足一切功德亦時世有深明了

此義所說偈言

无上供養具 供養如來眾 以此功德緣 所生名財寶

身色常端妙 亦得樂義難 具足諸功德 智慧轉高增

供養也直心 无我我所者 以此福緣 生處得供養

諸佛所稱讚 四法常親近 所生常尊貴 功德轉高增

廿六齋年

佛說菩薩藏經卷一

一技竟

大涌天且麻安周齊供養經

承奉十五奉齋生丁酉

書走臣齊濟此

王母 墓誌銘

王母 諱 永祿 祖 伯倫

父 智 世 力 田 農 祭 常 謹 御 堂 且 尊 禮 夫

資 治 生 禮 尊 長 雅 其 御 遂 富 饒

第 館 聚 書 居 游 士 化 子 和 皆 為 儒 生 則

其 業 系 往 諸 子 圖 禮 與 獨 倚 祥 扶

方 外 雲 居 處 了 元 東 林 常 想 時

攝 杖 屨 往 游 其 藩 元 祐 丙 寅 丑 年

知 終 於 贈 下 享 年 六 有 二 前 此 三 年

自 嘗 宅 兆 於 青 山 之 西 原 松 檜 成 引 美

去 月 禮 過 里 之 親 好 相 告 苦 勸 戒

若 將 遠 別 哀 及 年 加 中 外 之 吊 哭

者 皆 曰 若 禮 也 身 先 配 陳 氏 健 堂

而 謝 氏 子 也 及 榘 學 仁 森 棟 權 榘

植 學 信 前 死 女 及 董 敬 高 友 諒

其 孝 榘 等 遂 以 某 十 月 某 甲 子

奉 窆 室 如 君 之 初 志 榘 娶 李 氏 女 於

庭 堅 母 夫 人 為 誥 无 弟 故 榘 因 乞 銘

太 夫 人 曰 汝 以 外 家 故 不 可 辭 銘 遂 銘 之

銘 曰

以 義 力 其 窮 以 智 謝 其 豐 以 理 考

其 終 以 文 歎 其 封

楊岐之道四葉而得圓悟大真
 門起其宗六葉而得應庵法益
 光道益盛密庵之道亦四葉而得
 靈巖之之道若夫靈之靈浮世如碧
 潭之潭秋月當之下葉有光如室葉
 源以竹旬喜公閑極靈以竹廬雲公
 靈居坐公皆有語行於世者日本南浦
 明公禪師遊歷巨宋大業林恭雲雲
 得正傳歸本國行道今觀其四會語
 上雲小益拈古頌古法語及胎贈之作
 如折瓣檀片昏香伏讀不忍去手信
 知得的旨若迥然殊別也余於昌春宿有
 緣親故未獲觀此錄亦不枉東海之一
 行也時元德庚午孟夏結制前五
 建長住山法姪比丘 普後 敬跋

411
62

終